

特活研究

No. 96 ―今こそ特別活動！―

2025. 3 愛媛県教育研究協議会 特別活動委員会



第 55 回愛媛県特別活動夏季研究会に寄せて

愛媛県教育研究協議会特別活動委員会

委員長 銚 岩 俊 二

第 55 回愛媛県特別活動夏季研究会が、ここ南予の地、西予市で開催できますことに心から感謝申し上げます。コロナ禍を経験し、多くの教師が集団活動の中で子どもが学ぶことの重要性を痛感したのではないかと思います。それにもかかわらず、働き方改革や業務改善という名のもとで学校行事等が無くなったり、縮小されたりしているという話を耳にします。すべてをコロナ禍前にただ戻せばいいというわけではありませんが、今一度立ち止まって子どもたちにとって本当に必要な活動は何か、何のために活動しているのかを考える必要があると思います。その考えるヒントがこの研究会の中にたくさん詰まっています。今研究会は、大会主題「つながりを生かして学び、未来を切り拓く力を育む特別活動の創造」～「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の視点を踏まえた『物語づくり』の実践を通して～のもと、県下の特別活動の実践をもとに協議する機会となります。特別講演では文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官 和久井 伸彦 様から、「多様性を認め合い、協働的な集団活動を目指す特別活動～学級活動の基礎・基本を通して～」という演題で話をさせていただきます。また、午後からの分科会においては愛媛大学特定教授 中尾 茂樹 様、同じく准教授 梅田 崇広 様 から御助言をいただくことになっております。大変御多用の中、私たちのために御指導いただきます3名の皆様には感謝申し上げますとともに、特別活動の最先端の情報に触れ、御参会の皆様とともにその魅力を感じられる有意義な研究会になると確信しております。

私は、初任者で務めた中学校での生徒会活動との関わりがその後の教師としての考え方や取組に大きく影響していると感じています。その学校では、生徒会の企画として、河口で縦干し網を行ったり、長い距離を歩いてみたりと様々な取組を行っていました。長い距離を歩く企画は、最初55km先の海辺の朝陽を見るというテーマで夕方出発して試歩しました(30年以上たった今も30kmほどの距離で続いています)。初任者の私は、生徒会の担当でもなく、若いからという理由で手伝わせてもらっていました。その時の先輩の先生方や生徒と活動したワクワク感は未だに忘れられません。その後、生徒会担当をたくさん経験させていただき、体験し協働することや対話することなど特別活動の魅力や重要性をたくさん感じてきました。しかし、振り返ってみると特別活動の目的や方法原理などの学びが圧倒的に不足していたと反省しています。ここにお集まりの皆さんは、特別活動の魅力をすでに感じて様々な実践を積み重ねたり、これから挑戦しようと考えていたりする方々だと思います。ぜひ、この研究会でたくさんの学びや取組のヒントを掴んで、各校に持ち帰り、特別活動の魅力を広げていただきたいと思います。

結びに、今研究会の開催に当たりまして、分科会の発表、司会や記録、準備や運営に携わっていただいているすべての先生方に、心より感謝申し上げ、開会のごあいさつといたします。

特 別 活 動

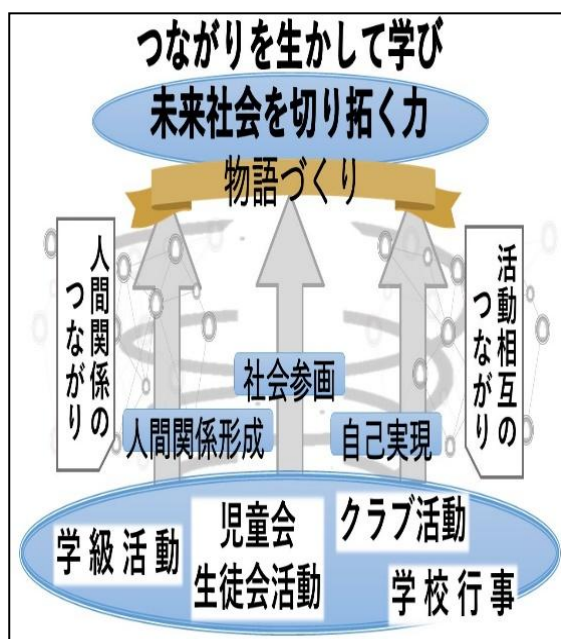
I 研究主題

つながりを生かして学び、未来社会を切り拓く力を育む特別活動の創造
—「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の視点を踏まえた『物語づくり』の実践を通して—

II 研究主題のとらえ方

急速に変化し続ける予測困難な現代社会においては、多様な価値観を認め合い人とつながる力や自分たちでよりよい新たな社会を築いていこうという意識、自己理解を深め自分の人生を切り拓いていく力が必要である。特別活動は、これまで様々な集団活動を通して、児童生徒が社会で生きる基盤となる力を育んできた。協働性や互いを認め合う土壌をつくり、生活集団、学習集団として機能するための基盤となってきた。特別活動における「なすことによって学ぶ」という実践的な活動が、集団への所属感、連帯感を育み、それが学級文化、学校文化への醸成へとつながり、各学校の特色ある教育活動に寄与したことは言うまでもない。学校生活がより豊かなものになるよう「何ができるか」を教師が児童生徒と共に考え、創意工夫したり試行錯誤したりすることが、今後の特別活動には一層求められる。

「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の三つの視点を踏まえ、児童生徒が様々な集団活動に自主的、実践的に取り組むことは、集団の中で個が成長し、その成長が結びつきながら集団の成長へとつながる。そこで「つながり」をキーワードに、人間関係や活動相互の研究を進める。多様な他者と協働する力やキャリア教育の中での自分らしい生き方を【人間関係のつながり】とし、児童生徒の教科等横断的な学びや指導と評価の一体化、小中連携を【活動相互のつながり】と捉える。ポートフォリオなどの振り返り、活動の軌跡を大切に『物語づくり』を通して、「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせながら、未来社会を切り拓く力を育成できると考える。



III 研究のねらい

- 1 「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の三つの視点を踏まえて、児童生徒が多様なつながりを生かして学ぶことのできるような授業実践と振り返りについて研究する。
- 2 「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせ、未来社会を切り拓く力を育む特別活動の在り方を、各教科や特別の教科道徳、総合的な学習の時間等との関連を図りながら研究する。

IV 研究の視点 【 表記：(人)…人間関係形成 (社)…社会参画 (自)…自己実現 】

1 よりよい人間関係を築く資質・能力の育成

～魅力ある学級の物語づくり～

一人一人が生かされる学級活動を展開し、それに伴い集団も成長する学級文化を育む。

(人) よりよい人間関係を形成し、よりよい生活を築く実践のための話し合い活動の充実

(社) 温かい学級集団の中で、自己の成長を目指す意思決定の在り方

(自) キャリア形成と自分らしい生き方に向けた一人一人の意思決定の在り方

2 よりよい学校生活へ参画する資質・能力の育成

～自発的、自治的な児童会・生徒会活動の物語づくり～

学級や学年を超えた児童生徒相互の連帯感を深める自発的で自治的な活動を効果的に展開する。

(人) 互いのよさを認め合い、主体的に取り組む異年齢集団活動の充実

(社) 課題解決に向けて、主体的・協働的によりよい合意形成を目指す実践の在り方

(自) よりよい学校や地域への自治的な活動による充実感を持たせる評価や振り返りの工夫

3 よりよいつながりを楽しむ資質・能力の育成

～協働し、認め合うクラブ活動の物語づくり（小学校）～

異年齢集団での活動を通して個性の伸長を図り、体験を重視した活動を工夫する。

(人) 共通の興味・関心や思いやり・あこがれの気持ちでつながる異年齢集団活動の充実

(社) 地域の特色を生かし、地域の人や文化とつながるクラブ活動の在り方

(自) 異年齢集団で共通の興味・関心をより深く追求するクラブ活動の指導と評価の工夫

4 よりよい校風を確立しようとする資質・能力の育成

～集団への所属感、連帯感を深める学校行事の物語づくり～

創造的でダイナミックな体験ができる場や時間を保障し、所属感や連帯感を培う。

(人) 多様な他者との交流や豊かな体験活動を通して感動を味わうことのできる行事の充実

(社) 主体的参加で、特色ある学校やよりよい校風づくりにつながる学校行事の工夫

(自) 自他、集団の目標を肯定的に捉え、今後の活動によりよくつながる評価の工夫

V 評 価

1 特別活動の目標を分析し、育成しようとする資質や能力と評価の関係を明確にし、各学校の実態に応じた評価の観点を設定し、指導と評価に生かす。【評価の観点】

2 各内容の目標を踏まえ、学校の実態や発達の段階等に即して、明確な評価規準を教師間、児童生徒と共有し、児童生徒一人一人のよさや成長を積極的に評価する。その際、集団の質の高まりについても振り返り、評価し、その後の活動に生かす。【個と集団の評価】

3 活動の過程を重視し、自己評価、相互評価、教師の観察、児童生徒の記録、1人1台端末等を活用し、継続的、多面的、多角的、総合的に児童生徒の変容を評価することで活動意欲につなげる。【評価の方法】

VI 留意事項

- 全体計画と各活動・学校行事の年間指導計画の作成に当たっては、学校の創意工夫を生かし、学級、学校づくりを念頭に置きながら、学校の実態や児童生徒の発達の段階等を考慮して自発的、自治的な活動が助長されるようにする。また、各教科等の特性を踏まえ、適切な関連を図るとともに家庭や地域の人々との連携を工夫する。また、それらの計画は、必ず評価を伴うものとする。
- 特別活動と特別の教科道徳は、児童生徒の心を育てる二つの大きな原動力ととらえ、両者の充実を図る。学級や学校生活における特別活動での集団活動や体験活動は、日常生活においての道徳的実践の場であり、居場所づくりにもつながる。さらに、自己の生き方について考えを深め、集団の一員としての責任や役割を担うなどの社会参画の力を育てるためには、特別の教科道徳の授業との関連が重要である。両者の特質を十分理解し、児童生徒の変容を見取りながら評価を行い、道徳性の育成へとつながるよう研究を進める。
- 児童生徒一人一人が社会的・職業的自立のために必要な能力を育成するため、自らの生き方を考えることができるよう、発達の段階等に応じ、小中連携を図った組織的・系統的なキャリア教育を推進する。その際、「キャリアパスポート」を活用するなど工夫しながら、希望や目標を持って生きる意欲や態度を形成し、社会参画意識を醸成する活動等の研究を進める。
- 1人1台端末が整備され、特別活動の学習の一層の充実を図るための有用な道具としてICTを位置づけ、適切に活用することが求められている。以下のような様々な場面でのICTの効果的な利活用について実践を通して研究を進める。

〔学級活動〕 話し合い活動の促進、振り返りの即時可視化など

〔児童会・生徒会活動、学校行事〕 オンライン集会、集団決定やアンケート実施など

〔クラブ活動〕 活動記録の収集・蓄積・共有、活動発表時の動画利用など



特別講演

文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官

国立教育政策研究所教育課程研究センター 教育課程調査官 和久井 伸彦 先生

多様性を認め合い、協働的な集団活動を目指す特別活動

～学級活動の基礎・基本を通して～

1 教育の現状と今後の予測

将来の予測が困難で、変動性、不確実性、複雑性、曖昧性が特徴的な現代社会において、教育を取り巻く環境は大きく変わった印象がある。特に、GIGAスクール構想による1人1台端末導入により学習や生活が大きく変わってきている。これから先も数年で一気に社会の変化が起こってくる可能性もある。統計を踏まえた予測では、日本の人口は25年後の2050年には1億人までに減少し、15歳から64歳の生産年齢人口の比率が約50%に落ち込む見込みとなっている。経済を支える人が全人口の半分になってしまい、一人一人がしっかりと社会に参画し、様々な活動に対して積極的に働き掛けていかないと、日本の経済がうまく循環しなくなる。日本財団「18歳意識調査」を見ると、「自分で国や社会を変えられると思う」、「社会議題について、家族や友人など周りの人と積極的に議論する」と回答した若者の割合が他国に比べて低く、社会への関心がとても低いことが分かる。そのため、特別活動の様々な場面で様々な人のために働くという経験がとても重要になってくる。

人生100年時代を迎え、65歳にも雇用の確保が義務化され、定年の年齢も引き上げられる。従来であれば、教育を終えて生涯を通して同じ仕事に従事する働き方が多かったが、変化の激しい時代に労働期間が長くなると、今後はマルチステージの時代へと変わっていく。知識やスキルの再取得のために学び直して新しい職業を選んだり、異なる活動を同時並行で行ったりするなど、生活の仕方や過ごし方、働き方などが、変化していくと予想されている。そのため、新しい職場で、新しい人と関わりを持ち、新たなことにチャレンジしていくことも大事になる。一方で、グローバル化も進んでいき、外国人の割合が約40年後には今の5倍近くの10%になると予想されている。学校でも様々な国の子どもが同じ教室で学ぶようになり、宗教、習慣、考え方が異なる人たちと、人間関係を築く力、お互いの考えをまとめる力が大切になってくる。この他にも、教室には不登校、発達障がい、特異な才能のある子など、多様な子どもたちが在籍することになる。教室で点で過ごしている子どもたちが、関わりを持つことで線でつながり、様々な取組をすることで面になり、一つの学級としてよりよい学校生活を送れるようにしていく必要がある。学級活動や特別活動を通して、人間関係を築いていくことがより重要になってくる。

2 特別活動が目指す資質・能力

多様性が進み、社会参加への意思が低下していく社会において大切なのは、特別活動が目指す三つの力「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実践」である。「人間関係形成」は、学級や

学校生活の中で、互いのよさを生かしながら協働的に取り組み、よりよい人間関係を築こうとする視点である。これからの社会において、一人一人のよさ、可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら社会をつくり上げていくことが求められている。そこで、「人間関係形成」の視点を持ち、違いを認め、みんなと共に生きていく力を育てていくことが大切になる。「社会参画」では、現在そして将来に所属する様々な集団や社会に対して積極的に関わり、よりよい生活をつくろうとする自治的能力を育むことが求められている。「自己実現」は、将来を見通して、今の自分にできることを考え、よさや可能性を生かして実践しながら、よりよい自分づくりを目指す視点である。ここでいう「自己実現」というのは、集団の中で現在または将来の自分の生活の課題を発見し、よりよく改善しようとする視点になる。「自己実現」の視点を通して、なりたい自分に向けて頑張る力を育てていく。こうした三つの視点を手掛かりにして、特別活動の目標や資質・能力が整理された。特別活動の目標は、学級活動、児童会・生徒会活動、クラブ活動、学校行事の全てを総括する目標となっている。また、育成を目指す資質・能力を踏まえ、小中高等学校の系統性を考慮して示されている。集団や社会の形成者としての見方、考え方を働かせるとは、学級や学校の一員として学校生活をよりよくするために、自分にどんなことができるかという問題意識や課題を発見する見方や考え方を持つということが大切になる。つまり、参加者でもなく、傍観者でもなく、形成者として、自分に何ができるかということを中心に考えながら過ごしていくことである。教師に言われたら一生懸命やる子は多いと思うが、主体的に取り組む自分から働き掛けることができるような見方・考え方を働かせることが大切になる。特別活動の学習過程では、集団活動の中で様々な問題が生じ、それを解決していかなければならない状況が出てくる。その時には、数が多いから決めてしまおう、強い人の意見に従おうではなく、お互いのよさや可能性を生かしながら話し合い決めていく学習過程を通して、三つの資質・能力を育てていく。

育成する力は、各教科共通で知識及び技能、思考力・判断力・表現力と学びに向かう力・人間性となっている。その際、特別活動では、「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の三つの視点を手掛かりとして、資質・能力が整理されている。つまり、「人間関係形成」に関する知識及び技能が育成されているか、人間関係形成に関わる思考力・判断力・表現力が育成されているか、「人間関係形成」に関わる学びに向かう力・人間性等が育成されているか、それぞれの視点で見ながら、その資質・能力を育成していくことが大切になる。眼鏡に例えると、子どもたちが活動している様子を見るときに「人間関係形成」の眼鏡をかけ、友達の違いを認め合って、お互いを受け入れながら「人間関係形成」しているのかという視点で資質・能力を見取っていく。ただ、「人間関係形成」だな、「社会参画」だなと分けて見ることはできないので、重なりながら見ることも大事な視点になってくる。三つの視点を意識して、子どもたちの資質・能力を見取っていくことが大事になる。

各学年が上がるごとに活動内容が広がり、資質・能力も高まっていく。小学校の学級活動で学んだ資質・能力が小学校でとどまるのではなく、中学校の学級活動に生かされ、他の学校行事や生徒会活動と関わりながら高まっていき、社会で活用できる汎用的な力が育っていきと期待される。政府がこれからの教育の方向性を示した第4期の教育振興基本計画では、特別活動が目指す方向性と一致するものが多く示されている。2040年以降の社会の教育政策におけるコンセプトとも言うべき基本政策として次の二点が示された。一点目が2040年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成、二点目が日本社会に根差したウェルビーイングの向上になる。特別活動

の目標にある、集団や社会の形成者としての見方、考え方を働かせて、自分たちの生活を自分たちの政策でよりよくしていく力が必要であるという考え方と重なってくる。また、その解決のためにイノベーションにつなげる取組を行い、これまでにない工夫した解決を目指すということは、学級活動や児童会・生徒会活動で創意工夫のある活動を通すことによって育成することと同じである。持続可能な社会の創り手に必要な資質・能力として、協働性、主体性、リーダーシップ、創造力、課題発見・解決力が挙げられており、特別活動の確実な実践を行うことによって大切さを実感することができる。二点目の日本社会に根差したウェルビーイングの向上についても、目指すところは特別活動と一致している。特別活動において、一人一人の違いを尊重し、互いのよさや可能性を生かしながら、共感的な学級の雰囲気をつくったり、一人一人が幸せや生きがいを感じられるような学級や学校生活をつくったりしていくということと同じである。ウェルビーイングは各教科のテストのように得点に表すことができないが、指標として全国学力・学習状況調査の質問紙調査の結果を活用している。学級活動に関わるものとして、「学級生活をよりよくするために、学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていますか」という質問がある。令和5年の調査の結果では、児童の肯定的な回答が77%、否定的な回答が22%となり、教師の肯定的な回答は94%、否定的な回答が5%になる。教師は一生懸命指導しているが、子どもたちはそこまで意識が向いていない。教師が指導していることが子どもたちの意識につながるよう学級活動の指導の充実が大事になる。

3 学級活動（１）の指導の充実

学級活動の目標には、学級活動（１）と学級活動（２）（３）の学習過程の違い、特質の違いが示されている。合意形成とは、学級活動（１）の話し合い活動において、互いの意見の違いや多様な考え方があることを認め合いながら、学級としての考えや意見をみんなで合意していくことである。意思決定とは、学級活動（２）（３）の話し合いを通して、一人一人が自らの学習や生活の目標を決めるということである。学級活動（１）の指導のポイントは、集団や社会の形成者としての見方や考え方を働かせて、問題をいかに見つけるか、生活上の諸問題に気付くかである。子どもたちは、日常会話の中や先生との日記などのやり取りの中で、ちょっと困っていることや悩んでいること、もっとこうしたいなということがある。教師はこれをキャッチして、それが議題として扱えるということを伝えていく。議題が学級全員の必要なものであれば、みんなの意見は活発になり実践まで継続していく。問題意識を高めていく例として、気付いたことをいつでも提案できるように議題箱や提案用紙を設置しておくことがある。環境が整っていることによって、子どもたちが学級の問題に関わることができる。その時、議題箱を透明にしたり、提案用紙を内容によって色分けしたりするなどのちょっとした工夫で、子どもたちの興味が高まる。また、1人1台端末を利用して、議題を集めている例もある。家で思いついた議題をすぐに提案できたり、みんなの考えを共有したりできる利点がある。さらに、議題を廊下に掲示し共有している学校もある。子どもたちは、議題を提案する経験が少ないため、議題を掲示することで参考になる。なかなか議題が集まらないときには、教師からの提案も考えられる。ただ、その時には議題を1つ提案するのではなく複数の議題を提案して選択させることで、提案理由が生まれてきたり必要性が出てきたりする。そのためには、教師自身が、望ましい議題を理解しておくことが重要になる。研修会などで議題について話し合ったり作ってみたりするといい。議題の例として、よくあるのは集会の開催だが、学級新聞コンクールというものもある。2学期終わりの頃に、自分たち

のクラスが頑張ってきたことを紹介する活動である。学級の話合いで決めた共通の話題の部分とグループや個人で決めた自由な話題の部分を取り入れることも考えられる。新聞ではなくカルタに自分の学級のよさをまとめるという取組もある。ぜひ、学級のよさを伝える方法や振り返る方法を話し合って取り組んでほしい。人間関係をよくする集会活動としてフルーツバスケットをやることもあるが、友達のことを知るという視点があれば、自己紹介バスケットにしてお互いのことを知る機会にしようとなる。遊びながら、または活動を通して、結果的に人間関係がよくなるような議題がたくさん見つかるようにしたい。よい議題とは、学級の全員が協働して取り組まなければ解決できないものや自分たちの力で解決できるものである。

課題解決のためには、自発的、自治的な範囲や任せられない範囲を子どもたちに示しておくことが大切になる。教育課程の変更に関わること、時間、場所の設定や時間割の変更等は、子どもたちが話し合うのではなく教師が設定することである。提案理由が合意形成のよりどころとなるため、現状の問題、解決の方法、解決後のイメージを、提案者と計画委員、教師が話し合い、明確にしておく必要がある。単に楽しい集会をするという提案理由ではなく、例えば、いろんな友達のことを知るための集会にしようとする提案理由だと焦点化した話合いができる。よりよい合意形成のためには、意見のよさ、可能性などを受け止めながら聞いて生かそうとすることが大事になる。少数意見を尊重し、一人一人の思いを生かすことができないかと常に思いながら、創意工夫していこうと考えることが大切になる。教師は見守る姿勢が基本になってくるが、困っている子がいたり、不安に感じている子がいたりする場合には、教師が仲介して調整をしたり思いを聞いたりして、合意形成のモデルとなることも大事になる。そして、最終的には、子どもたちだけで、話し合えるようにしたい。合意形成のプロセスの例として「特別活動指導資料」には、「意見を合わせる、条件をつける、共感的に理解して譲る、多数決を行う、少しずつ全部行う、優先順位を決める、新しい考えをつくる」が示されている。学級会はディベートとは違いAかBかを決めるような話合いではなく、複数の意見の中からよりよいものを少数の意見を大切にしながら決めていくことが大切である。

「クラッカーを鳴らしたい。」という思いを生かそうと、粘り強く話し合う様子をご覧いただけたかと思う。私も、同じようなシチュエーションがあった。4月に「どうぞよろしくの会」をする際、プレゼント交換をしたいという風になった。しかし、発達的にこだわりの強い男の子がおり、その子一人だけがプレゼント交換はしたくないと強く主張した。何とかその男の子の不安を取り除いていきたいと考え、私から「何か解決方法はないかな。」と提案した。子どもたちは一生懸命アイデアを出し合い、いつも給食で使っている牛乳パックを使ってペン立てを作り、みんなですべてを渡せばいいのではないかということになった。男の子はすごくいいなと認めてくれ、当日、プレゼントを持って参加することができた。一人一人の思いを大切に授業することとはとても大事なことである。ぜひ意識しながら実践していただきたい。そのような実践の中で、子どもたち同士が関わり合いながら、楽しそうに活動する様子が見られる。また、振り返りもとても重要である。これは、1年生が書いた振り返りだが、「仲間がいっぱい応援してくれたから頑張れた。楽しかった。」「みんなでおそろいのブレスレットを作ったから、やる気がいっぱい出た。みんながもっと仲良くなったと思った。」など、友達と一緒に頑張ることのよさや、学級としての高まりを感じて書いている。この1年生は、振り返りを生かして新たな活動に取り組んだため、すごく一生懸命取り組んでいた。ぜひ、活動に対しての振り返りを丁寧にやっていただきたい。振り返る際には、どんな力が身に付いたかを明確にするような工夫をすると、こんな力

が付いたから、この力を次に生かしてしていきたいという子どもの自信にも繋がっていく。

学習指導要領の改訂において、小学校と中学校、あるいは、中学校と高校の繋がりを維持することが明記された。それを受け、中学校でも様々な取組に挑戦してもらっている。例えば、中学校1年生で「どうぞよろしくの会」をやっているところもある。入学当初、いろいろな小学校から集まってくることもあり、不安を抱えている子も多い。学級活動(1)「どうぞよろしくの会」に取り組み、友達のよさについて知ることで、円滑に学校生活がスタートする。これは、生徒指導の未然防止にも繋がっていくと思う。中学校の先生方は、小学校でどんなことをやってきたかを聞きながら進めていただきたい。他にも「用務員さんに感謝を伝える会をしよう」のように、人間関係や学校生活に関わるような問題にチャレンジすることもできる。中学校は時間がないと思うが、少しでも実践をして、よりよい生活づくりについても考えていただきたい。話し合い活動では、小学校と同じように短冊を使ったり、マグネットを使ったりすると、中学生も安心して学級会に取り組みめる。活動を通して、中学生でも男女一緒に仲良く取り組んだり、感謝の思いを伝えたりする様子が見られているので、ぜひ深めてほしい。中学校では、小学校で学級会に取り組んでいることが前提となる。小学校の先生方には、しっかりと話し合う経験を積み上げて中学校に繋げていただきたい。

4 学習活動(2)(3)の指導の充実について

目標にあるように、課題解決に向けた話し合いを生かし、自己の課題の解決および将来の生き方を描くために、一人一人が行動の目標を決めていくことが大事になる。小学校の学級活動(2)の4つの内容、学級活動(3)の3つの内容については、全ての学年で扱うことになっている。今回はテーマに沿って、(2)イと(3)イを中心に確認したい。(2)イ「よりよい人間関係の形成」は、特別活動の中で大切にしている内容になる。ここでは、互いのよさを見付け、違いを尊重し、仲良く助け合って協働する力を育むことを目指している。「友達と仲良し」「仲直り」などを題材に、自他を尊重する態度を養うことによって、いじめの未然防止に役立てていきたい。また、(3)イ「社会参画意識の醸成や働くことの意義の理解」においては、友達と力を合わせて働くことのよさや、自分の仕事に対して工夫しながら役割を果たすことを学んでいく内容になる。係活動、学級や学校、あるいは地域のために一生懸命働く活動を題材に取り上げていく。中学校の学級活動(2)(3)も同じような内容になるので、確実に実践していただきたい。学級活動においては、教科書がないというところが難しい。学級活動の内容は年間指導計画に明記されているので、必ず確認してほしい。担当学年の年間指導計画だけ見ても、他学年の内容は分からない。特別活動主任を中心に題材一覧等を作成し、他学年との関係を確認したり、系統的に取り組んだりできるようにしてほしい。

学級活動(2)(3)の学習過程は、①問題の発見②解決についての話し合い③解決方法の決定④決めたことの実践⑤振り返りと進み、次の課題解決へとつながっていく。①問題の発見では、教師が設定した題材について学習をしていくことになる。ここは学級活動(1)と違う点なので気を付けてほしい。②解決についての話し合い③解決方法の決定では、具体的な解決策を話し合ったり、考えを広めながら自分の目標を決めたりしていく。④決めたことの実践⑤振り返りでは、意思決定をして終わりではなく、必ず粘り強い実践を行い、振り返りを常に活かしていくことが非常に大事である。授業は、①つかむ②さぐる③見付ける④決めるという4つの段階で展開していく。①つかむでは、子どもが実態をしっかりと把握していないと具体的な解決策を見付けるところには

繋がらない。アンケート調査などを行い、自分と同じように考えている子がいるとか、本当はやりたくないといけないのにできていないなど、自分自身で状況を把握したり意識を高めたりできるようにしてほしい。また、当番活動や係活動の様子をビデオに撮って、提示するのもよい。②さぐるでは、課題になっていることの原因の追求を行う。ここでは、キャリアパスポートも活用できる。キャリアパスポートは書くことが目的ではなく、教師と対話しながら、あるいは児童と話し合いながら、自分を振り返ることができるようにする。③見付けるでは、解決方法の具体的な内容を話し合って決めていく。学級全体やグループごとに話し合うことで、周りの友達の解決方法を知り、自分はこのように取り組んでみたいと、前向きに考えるきっかけにもなる。話し合ったことは、全員で共有できるよう、まとめ方や発表の仕方も工夫していただきたい。子どもたちだけで解決方法が見付からない場合は、専門性を活かしたチームティーチングも有効に活用する。地域のボランティアの方に話をしてもらったり、またはインタビューでアドバイスをたくさん出してもらったものを録画して、解決方法を決める際のヒントにしたりもできる。このような方法が難しい場合は、教師からアイデアをいくつか示してあげることも大事である。たくさんの解決方法の中から、自分に合ったものを決めることができるようにしたい。④決めるでは、終末に自分の行動目標を決めることを行う。その際、①つかむの段階で感じた自分の課題や現状を大切に、深い目標を決められるようにしたい。授業前と授業後の姿が変わらないのでは意味がない。具体的な行動目標なので、抽象的なものではなく、例えば回数や期限も自分に合ったものを設定できるようにしたい。

5 児童会活動・生徒会活動の指導の充実

異年齢の児童・生徒同士で学校生活をよりよくしていくことを目指している。集団の規模が大きくなるため、多様性が増してくる。一人一人の違いを認め合いながら、よりよい学校生活をつくり上げていくためには、児童会や生徒会活動を充実していくことが大切になる。児童会活動の内容は3つある。(1)は、児童会の組織づくりと児童会活動の計画や運営である。児童が主体的に組織をつくり、役割を分担し、計画を立てていく。主体的に組織をつくるとは、各委員会で自分たちの熱い発想を生かして実行するために必要な組織をつくるということだ。(2)は、異年齢集団による交流を図ることである。異年齢での関わりを通して身に付く力は大きい。中学校の生徒会活動においても(1)(2)は、小学校と同様である。(3)は、ボランティア活動などの社会参画である。地域行事への参加や、福祉施設でのボランティア活動など、生徒会を中心にした地域や社会の課題解決に向けた取組も一層重要になってくる。学習指導要領には、児童会活動・生徒会活動は、児童生徒の自発的・自治的な活動が効果的に展開されるようにすることが示されている。自分たちで問題を発見し、話し合って解決していく過程を踏みながら、創意工夫のある活動をしていただきたい。例えば放送委員会であれば、ただ放送するだけではなく、学校の紹介のビデオを作ってみんなに紹介するとか、飼育委員会がみんなに動物を好きになってもらうために小動物を触ってもらう機会を作るとか、そういった様々な活動が自分たちで展開できるとよい。生徒会では、生徒総会が充実して行われていると思う。生徒総会においては、学校の予算や校則の見直しを審議するだけではなく、ぜひ様々な学校生活上の諸問題についても話し合ってもらいたい。ある学校では、異年齢集団での活動をやりたいということで、生徒総会で意見を出し合っていた。賛成や反対意見を短冊に表しながら、みんなで取り組みたい内容について発表した。学級会をたくさん経験してくると、自分たちで話し合って決めるよさを分かっているの、生徒総会におい

でも、たくさんの生徒が自分の意見を発せたいと、発表待機場所に並んで待っている姿が見られていた。話し合いで決まったことは実際に取り組み、異年齢で関わることの楽しさやよさを実感できていた。児童会や生徒会では、異年齢の関わりを通して、下級生が上級生に対して親しみや憧れ、尊敬の念を持ったり、上級生がリーダーとして下級生と関わる力が育ったりする。多様性のある社会、あるいは人間性を深めていく上で、こういった活動は極めて重要だ。

小学校では高学年が中心となって運営するため、低学年に児童会の様子が伝わりにくいところがある。低学年も主体的に参加するためには、児童会役員や高学年の児童と上手く関わりながら活動することが重要になる。児童会のめあてを、低学年のことを考えてよみがなを書いて提示している学校もある。他の人のことを意識して取り組むことが、多様性を認め合うことに繋がってくると考える。各委員会においても、全校児童の意見を集めるために、委員会ごとのポストを作ったり、アンケート用紙を配って集めたり、あるいは、タブレットで意見を集めたりすることもできる。また、委員会からお知らせする時も、新聞で知らせる方法もあるし、実際に下級生の教室に行って紹介することもできる。低学年からすると、分かりやすく紹介してくれるお兄さん、お姉さんってすごいなと憧れの気持ちを持ち、自分が高学年になった時にも、意欲的に取り組むことができるようになると思う。

生徒会の取組は、自分の学校だけだと内容が固定してしまうこともある。生徒会オンライン交流会で、生徒会の様子を紹介し合うことで、自分たちにはない他校の取組を知り、実践に生かしている都道府県もある。ぜひ愛媛県でも生徒会同士が繋がり、さらに自分たちの活動を高めていていただきたい。

6 おわりに

特別活動の各活動を通して多様性を認め合い、協働的な集団をつくっていくことは、学級経営の充実にも繋がる。学習指導要領実施状況調査の結果の一部を紹介したい。「学級活動での集会活動に積極的に取り組んでいる」と、「自分にはよいところがある」との関連をグラフに表した。これを見ると、集会活動に積極的に取り組んでいる子ほど、自分にはよいところがあると答えていることが分かる。また、「いろんな人の意見を大切にして、学級としての考えを求めようとしている」と、「自分と違う考えを理解しようと努めている」についても、関連があることが分かる。つまり、学級活動に積極的に取り組むことは、自分のよさや、多様な他者を認めることにもつながることになる。また、令和5年度の全国学力・学習状況調査結果を活用し、課題分析に関する調査研究がなされ、主体的・対話的で深い学びに向けた授業改善と、非認知能力と言われている挑戦心・達成感との相関関係を分析した。それによると、主体的・対話的で深い学び、総合的な学習の時間、学級活動、道徳の時間と、自己有用感とには正の相関が見られている。特に学級活動においては、「人が困っている時に進んで助けている」と、「自分と違う意見について考えるのが楽しい」という項目に、強く相関が見られることが分かった。学級活動において、友達と協力して取り組むことや、話し合いの中で合意形成をしていくことのよさを感じていることが関係していると捉えている。ぜひ学級活動を積極的に取り組み、様々な人との関わりを十分に持つことで、多様性のある協働的な集団活動を展開していただきたい。学級活動への積極的な取組は、様々なところで効果を発揮している。例えば、「いじめはあってはいけないことだと思いますか」という項目で肯定的な意見が多く、「人の気持ちが分かる人間になりたいと思いますか」という項目でも、ほとんどの児童がそういった思いを持っていた。また、学力の向上にも繋がっている。全

国学力・学習状況調査の平均点から16点ほど低かった児童が、学級活動の研究に取り組んだことによって、平均点と同じところまで高めることができた。これは、人間関係がよくなったことによって、自分の意見を発表しても友達が認めてくれるという安心感が生まれ、学習意欲の高まりに繋がったのではないか。現在、個別最適な学び、協働的な学び、主体的・対話的で深い学びが求められている。そういった学びを進めるにあたっては、学級活動を通じた学級経営の充実によって、人間関係が高まっていることが大変重要になってくるため、ぜひ学級活動への取組を進めていただきたいと願っている。国立教育政策研究所のホームページで、様々な資料や映像も公開しているので、校内で周知したり、市町村等で考えたりしていただければと思う。

7 質疑・応答

○ 学級会における提案理由をよりよいものに深めていくためには、どのようなことに気を付ければよいか。また、特別活動主任として、教員に学級活動(1)の楽しさや教育的意義を知ってもらうために、どのような方法があるか。

→ 提案理由を明確化したり練り上げたりしていくことは難しいが、ここが一番肝になってくると思う。最初のうちは教師が関わり、日記の中や子どもの話の中からいろんな課題を見付け、提案するのがよい。学級会で話し合う内容は、人間関係に関わる人が多いので、悩んでいることはないか、もっとこうしたいと思うことはないかと、丁寧に聞いてあげることが大事である。

教員への広げ方については、実践したことを伝えることも大事だが、やはり子どもの姿の変容を伝えることが大切になる。研修の際に伝えたり、「特活だより」を作成して、その触りを職員会で伝えたりする方法がある。また学年の先生との会話を通して、少しずつ広めていくことも大事になってくる。

○ 児童会の活動は、休み時間を使うことが多く、児童も教員も負担が大きい。児童会活動が無理なく持続できる方法を教えていただきたい。また、夏休みから体育館の改修工事が始まるため、一同に集まれる場所がない。参集しなくても盛り上がる方法があれば教えていただきたい。

→ 活動時間の確保については、授業中に活動するのは難しく、苦しさもあると思う。例えば、担当する人数を必要最小限にしてできるだけ活動回数が減るようにする、グループ編成を工夫するなどの対応が考えられる。

参集せずに実践する方法については、集会室や校庭など別の場所で集まる、放送などを活用し、人数を分散して数カ所で同時に行う、ICTもかなり使えるので一つの場所から発信して同時に行う、あるいは、本来は全校が集まるのが望ましいが、オンラインで共有して教室ごとに参加するなどが考えられる。もし近くに公園や広場があるならば、そこまで行く道中も異年齢で関わられるようにし、行った先でもまた異年齢で遊ぶような経験をさせることを取って行うことも一つの方法ではないか。

第1分科会「とっかつはじめのいっぽ」**模擬学級会の体験を通して****特別活動委員会研究部**

第1分科会では、参加者全員が児童生徒役となり、学級活動でのアイスブレイクや模擬学級会を行うことで実践場面での活用を考える活動を行った。また、参加者の多くが若手教員である実態を踏まえ、特別活動に関する日頃の悩みを全体で共有し、解決策を考える時間を設けた。

【アイスブレイク】

アイスブレイクとは、本題に入る前に行われる短い雑談やゲームのことである。学級開きなどに導入することで互いを知り、緊張をほぐす活動のことである。以下に例を挙げる。

形態	名称
ペア	・セブンイレブンじゃんけん ・ギョウザじゃんけん
グループ	・アドジャン（サイコロ）トーク ・絵しりとり ・ホワイトボードゲーム
全体	・9ゲーム ・手拍子カウント ・シャベリカ

本分科会では、特にホワイトボードゲームを中心に、小集団で合意形成を図る場面を想定して活動を行った。

【学級（会）】

学級は、児童生徒の学校での基本集団であり、民主的なコミュニティである。自分たちのことは自分たちで決めることができるという感覚を育みたい。

ポイント1 学級を組織として捉える

組織として大切な要素は、①共通目的（ゴールやビジョン）、②貢献意欲、③コミュニケーションと言われる。学級で捉え直すと、①共通目的は「こんな学級にしたい」という思い、②貢献意欲は互いに貢献し合う、学び合う、助け合うという関係性、で捉えることができ、それを支える③ポジティブなコミュニケーションが話合いの温かい雰囲気を作る上で重要である。

ポイント2 話合いで大切にしたいこと

学級での話合い活動は、児童生徒の学級をよりよくしたいという気持ちがスタートである。充実した話合いになるように以下のことに留意したい。

- ① 何のためにするのか
→ 提案理由は合意形成を行う拠り所となる。
課題を明確化し、解決策を考えられるようにする。
- ② 何をするのか
→ 実際に行うことを明確化する。
- ③ どのようにするのか
→ 具体的方策や役割分担、組織を明確化する。

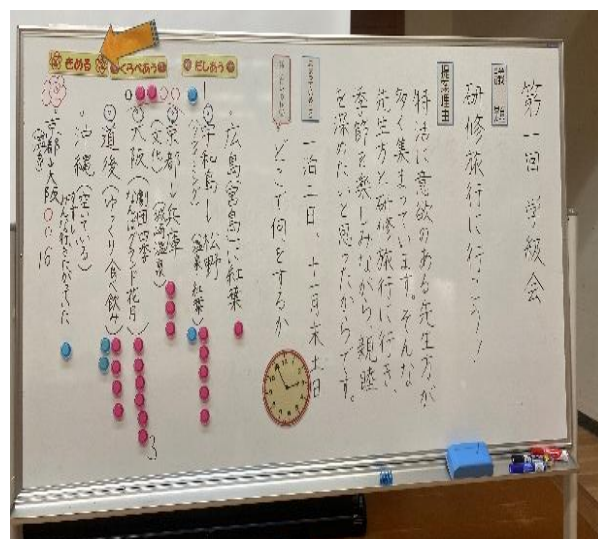
【模擬学級会】

模擬学級会では、「研修旅行に行こう」を議題に話合い活動を行った。児童生徒の目線で学級会を見つめ直し、どのように進めるとよいのか検討した。

【グループ討議】

日頃の特別活動での悩みについて共有を行った。

- ・多数決以外の意思決定の方法。
→ ボルダ方式、トーナメント方式、問い直し、折り合いモデル。
- ・発表者が同じになってしまう。
→ 小集団で発表の機会を創出。
学級会は全員発表などのルールづくり。
- ・台本は必要か。
→ 習慣付くまではあってもよいが、最終的には自分たちでできるように指導する。



第2分科会 小学校学級活動(1)**よりよくつながって学校生活を創る****学級活動(1)の授業実践****～「学級力アンケート」の活用を通して～**

鬼北町立日吉中学校

教諭 亀井 涼香

提案要旨**1 はじめに**

本校は、愛媛県南東部の高知県境に位置し、生徒数10名のへき地1級の小規模校である。「豊かな人間性を育み、自己や郷土に自信と誇りをもつ生徒の育成」を教育目標に、日々の教育活動に取り組んでいる。平成30年度、令和5年度を境に、生徒数が急激に減少しており、生徒にとって多様な考え方に触れる機会や学び合い、切磋琢磨する機会が少なくなっていることが課題である。また、本校は文部科学省の小中一貫教育に関する教育課程特例校の指定を受け、独自教科「郷土学」を新設し、地域の協力を得ながら「ふるさと日吉」について学習している。

2 実践事例**(1) 「学級力アンケート」の実施**

生徒総会に向けて全校一斉に行った学級活動の話し合いで、「自分から積極的に行動できていない」「自信をもって行動できない」などの課題が挙げられた。そこで、生徒の主体性を育むために「学級力アンケート」を全校で実施した。その結果を受けて学年ごとに課題を見付け、よりよい学級にするために何をすべきか話し合い、取り組んだ。

(2) 「よりよい学級づくり」を目指した2年生での取組**ア 個人で学級の実態を分析**

「学級力アンケート」の結果をもとに作成された学級力レーダーチャートから、学級のよい点、改善点を分析させ、ロイロノートのテキストにまとめさせた。

イ 全体での話し合い・分析

個人で分析したことをもとに、学級会を行った。学級力レーダーチャートを活用することで、学級の課題に気付き、その原因について考えることができ、学級の現状を話し合うことができた。

ウ 課題をもとにした話し合い活動

「積極性を克服していくため」ということについて学級会を行った。その際、ロイロノートの共有ノートを活用した。共有ノートを活用することで、発表しづらい生徒も積極的に自分の意見を書き込むことができた。

エ チェックシートの作成

課題解決のために、Google スプレッドシートを活用し、挙手や発言回数、学習内容の振り返りが記入できる表を生徒自身で作成した。また、毎週の記録をグラフに表すことで、視覚的に変化を捉えるようにし、それをもとに毎週振り返りを行った。この活動を11月から3月まで継続した。全員で比較し合うことにより、生徒自身の意欲付けにつながった。

オ 振り返り活動

2回目の「学級力アンケート」を実施し、活動の振り返りを行った。積極性や達成力の項目で伸びが見られた。振り返り活動では、生徒自身が自分たちの成長を感じる意見が多くあった。また、まだ不十分な部分があったので、今回の取組をきっかけにこれからも頑張りたいという前向きな意見も見られた。

3 成果と課題

- 「学級力アンケート」を実施することで、学級の強みや課題を可視化することができた。また、アンケート結果を比較し、伸びを確認できたこともよかった。
- 生徒が主体となって「よりよい学級づくり」ができた。
- ICT機器を活用したことで、視覚的に課題を捉えることができ、生徒の意見にも広がりが見られた。
- 系統的に学級力アンケートの実施と分析を行うことが必要である。
- 少人数学級における話し合い活動のマンネリ化など、話し合いの在り方について検討する必要がある。

研究協議

- 話し合い活動のマンネリ化を解消するために意識していることはあるか。
 - 一人一役を設け、全員に役が回るようにしたり、ロイロノートを活用したりしている。
- 小規模校において、活動の幅を広げていくためにも、他校との交流を増やしていくことが大切だと感じる。

第2分科会 小学校学級活動（1）**学級目標を基盤とした物語づくりの検討
～運動会における****プロジェクト活動の実践を通して～**

松山市立福音小学校

教諭 岡田 聖

提案要旨**1 はじめに**

教師と児童の想いや願いが合わさり学級目標ができる。教師と児童の想いや願いが込められた学級目標を中核として1年間の学級づくり＝物語づくりをしていこうと考え、実践を行った。4月の学級会で学級目標は6か条できたが、今回は、その中の1つである「最高学年としての自覚と責任」に焦点を当てた。この項目は、1学期の振り返りで特にできていなかったと感じている児童が多かった項目である。

2 実践事例**(1) 学級目標について****ア 学級目標づくり**

4月当初に先生が創る学級にするか、自分たちで創る学級にするかを決めるよう問いかけ、学級づくりの期待感と責任感を児童一人一人にもたせる。また、学級目標を決める際には、教師の想いや願いも必ず伝える。学級目標はできたものの6月に、目標に対する具体策がないという声が児童から挙がり、学級会で具体的な取組を話し合って決めた。学級目標ごとにキーワードや取組が追加され、より学級目標が具体的になった。

イ 学級目標の振り返り

1学期の振り返りでは、「最高学年としての自覚と責任」の項目について達成できていないと考える児童が多数おり、話し合う中で、最高学年として運動会を盛り上げたいという意見にまとまった。

(2) 運動会プロジェクトについて**ア 運動会プロジェクトにおける話し合い活動**

2学期に向けて、7月に運動会を盛り上げるための目的意識をもたせる話し合いを行った。学級で目的を共有することで、運動会プロジェクトを立ち上げることに決定した。

9月、「どんなことができるか」と「どんな準備や工夫が必要か」という2つの柱で話し合いを行った。その際には、ロイロノートのシンキングツールを用いて意見の整理・分類を行い、カテゴリー別に7つに分けた。プロジェクトにおける話し合いでは、賛成意見・心配意見ともに、理由が

大切であることを確認し、意見を比べ合いながら合意形成をした。話し合いを行う前には、下級生と中学生からのメッセージ動画を視聴することで意欲付けを行った。

そして、学級の意見をまとめて、学年での話し合いを行った。3学級での意見をもとに内容を決定し、運動会プロジェクトを開始した。

イ 運動会プロジェクトの取組

実際に行ったプロジェクトは4つである。1つ目は、プログラム・競技の司会や運営、オリジナルの全校体操の作成である。2つ目は、応援メッセージ、応援グッズ作りである。3つ目は、キャラクター、旗、スローガン、飾りつけなどの装飾である。4つ目は、下級生への運動会当日のサプライズメッセージである。

3 成果と課題

- 学級目標から自分たちで課題を見出し、最高学年として主体的に学級や学校をよりよくしていこうとする態度を育てることができた。主体的な姿勢は、運動会プロジェクトから3学期の卒業プロジェクトに派生した。
- 多様な集団で学級や学年を超えて関わり合う中で、積極的に集団に参画する様子が見られた。また、次年度にプロジェクトが受け継がれ、学校文化として形成された。
- 学級目標を基盤とした学級経営を行うために、教員が様々な教育活動の場面で継続的に言葉掛けを行っていかなければならない。
- プロジェクト活動を実施するためには、事前準備や時間の確保、どこまでを児童に任せるかなどの検討が必要である。

研究協議

- 学級目標は、子どもたちから学級目標を作りたいという思いが出てから作ることもできるが、学級目標を4月に作ることで、学級での指導に生かすことができる。
- プロジェクトを行う上での時間確保の難しさはある。1学期に話し合っておき、夏休みに教員間で共通理解を図る等、計画性が重要になる。
- 運動会プロジェクトは、4年度はしておらず、5年度から実施した。6年度も受け継がれ、学校文化として根付くことも期待できるが、年間指導計画に位置付けるなども必要になる。

第2分科会 小学校学級活動(3)

**「自主独立の道をゆく」子どもの育成
～つながりを生かし、目標を決定・実践・調整
する活動の工夫を通して～**

西予市立宇和町小学校

教諭 上田 真之介

提案要旨**1 はじめに**

本校が目指す子どもの姿に、「考え、判断し、一人でも実行する子」がある。VUCA時代を生きる児童にとって、多様な他者と協働し、自分のよさや可能性を生かしながら、自己実現を図っていく力が必要不可欠である。今、現在や将来に希望や目標を持って生きる意欲や態度を形成させようと、県下全体で「キャリアパスポート」を活用している。しかし、私は、自分自身のその活用の仕方にたくさんの課題を感じている。そこで、「キャリア形成とは何か」を探究したいと考え、本主題を設定した。本実践は、「私は〇〇な□年生になる!」という題材を、1・5・6年生の3学年が第3学期に取り組んだものである。

2 実践事例**(1) 見通しを持ち題材を自分事にするための手立て**

ア 今の自分を見つめさせる「つかむ」段階
「私は、〇〇な6年生になる!」と題して、ペアやグループなど学習形態を変えながら、今の自分を見つめさせた。

イ 異学年の関わりを生かした、1年後を「さぐる」段階
5年生は、卒業式前の6年生のリハーサルを見せてもらったり、6年生は中学生にオンラインでインタビューしたりして、交流する機会を設け、見通しを持たせ、目標設定の必要性を感じさせた。

(2) 自分に合った意思決定につなげる手立て

ア 多様な選択肢を持ち、解決方法を「見付けて決める」段階
親へインタビューしたり、6年生の先生の願いを聞いたりして、自分たちは様々な人から期待されていることを知る機会を設けた。

イ 自己調整して目標を再設定する「振り返る」段階

子どもたちは目標行動が達成できたかを毎日振り返りを行った。できなかった内容については、身近な人にその対策のアドバイスを受けながら、目標の再設定をしていった。

(3) 児童の変容を見取り指導に生かす評価の工夫
「つかむ・さぐる段階後の振り返り」の場面では、子どもの意識の高まりを認め、次の活動への意欲付けを図れるよう、具体的な行動を称賛したり、次回への期待のコメントを記入したりした。「全体活動を通した振り返り」の場面では、目標を達成できなかった原因を探る大切さへの気づきなどを評価した。子どものそれぞれのよさや成長を評価することで、自己実現への意欲を高められるよう工夫した。

3 成果と課題

- 「目標を持って生活をすることは大切である。」と考える子どもが実践前より増え、子どもたちは、実践を通して目標を持つことの大切さに気付くことができた。
- 「集団の中での自分の役割の自覚」と「自分らしい生き方への志向」に欠けていた。行動することで喜ばれる経験を重ねさせたい。
- 「つながりを生かす」機会のルーティン化と効率よく実践を積み重ねるためのカリキュラムマネジメントに目を向けたい。

研究協議・指導助言

- 自分に合った意思決定をするために、生成AIを多様な選択肢の一つとして利用しているところが、参考になった。また、キャリアパスポートの活用、異学年交流、家庭との連携など、多様な意思決定の手立てを工夫している。
- 子どもの姿を見取るために、教師が実際に子どもと一緒に行動し、学校生活の様々な機会を捉え、声を掛けていた。学級全員を見取ることや自己評価に関しては課題もある。
- 子どもの発達段階や実態に応じた子ども自身による目標設定となるような意思決定がなされている。

第3分科会 小学校学級活動（1）**自主的・実践的な力を育む児童会活動の工夫
～150周年行事の取組を通して～**

新居浜市立神郷小学校
教諭 越智 あずさ

提案要旨**1 はじめに**

本校は、「豊かな心を持ち、たくましく生きる児童を育てる」を教育目標に、日々の教育活動に取り組んでいる。

昨年度、本校は創立150周年という節目を迎えた。そこで1年間を通して、児童会を中心に全校で創立を祝えるような児童の自主的・実践的な力を育てたいと考え、本主題を設定した。

2 実践事例**(1) あいさつ運動**

運営委員が郷レンジャーとなり、朝に正門の前であいさつを行う。あいさつの様子を、放送でお知らせし、150周年にふさわしいあいさつを目指した。

(2) お祭り集会

新居浜市の太鼓祭りにちなんだ集会。（千羽鶴を贈呈、子どもたちが太鼓台に触れる機会がある。）運営委員が司会を行い、その場の状況を見ながら、太鼓台の退場の際に、アドリブでコメントに挑戦した。子どもたちは、場に応じて言葉を伝える力を身に付けていった。

(3) 神郷小150周年フェスティバル

各学年が出し物を用意し、全校で楽しむことができる活動を行った。

運営委員の児童は、主となり司会から役割を果たした。【スタンプラリーやマップづくり、各学年の出し物の紹介カードの製作など】

神郷小ショートパフォーマンスでは、アドリブの司会に挑戦し、場に応じてコメントを伝えることができ、盛り上がっていた。

(4) 神郷アニバーサリー集会

「仲間と共に未来へつなげ 150th anniversary」（スローガン）

150周年をお祝いする気持ちを込めて、全校集会を行った。

運営委員の児童は、集会を終えて、達成感と安堵感を味わい、リーダーとしての成長を感じられた。

(5) 掃除プロジェクト

代表委員会の話合いの意見をもとに、運営委員会からの案で150周年にふさわしい清掃活動をしようと試みた。大谷選手は、みんなの見えないところでも、ごみを拾っていたという話から、「目指せ！大谷翔平選手掃除プロジェクト！」という活動名を考えた。

☆項目…①だまって②すみずみまで
③時間いっぱい

☆評価…◎、○、△で運営委員が様子を確認。
最後に振り返りも行い、全校みんなで取り組むことで学校を変えることにつながった。

3 成果と課題

○ 活動後の振り返りの時間を大切にし、創立150周年の1年間を、高いモチベーションを維持しながら活動したことで、児童の自主的・実践的な力を育むことができた。

● 150周年に代わる児童主体の児童会活動の工夫を考える。

● 各委員会、各学級との連絡をとりながら、自主的・実践的な児童会活動を全校体制で広げられるよう工夫して取り組んでいきたい。

研究協議

○ 150周年の5つの活動はどう決まったか。
・アニバーサリー集会は子どもからの案。
・あいさつ運動は1年前からの継続。
・お祭り集会は、はじめの年間計画のときから予定されていた。
・時間やお金の都合もあり、前の年に管理職や教師で話し合い、取り入れた。

○ あいさつや掃除などマンネリ化しがちだが、大谷翔平プロジェクトなど、工夫して活動を行ってほしいと思った。

○ アドリブの目的
・聞いて、自分が感じたことを伝える力の向上にもつながるということで、アドリブの挑戦を試みた。

指導助言

○ 特別活動では、学校文化をつくる、リーダーを支えるフォロワーを育てる、ICTとその先の主権者教育を見つめるという要素が大切。

○ 子どもの世界に、教師が関心・好奇心を持って入り込むことで、視野が広がる。

第3分科会 児童会活動・生徒会活動・クラブ活動・学校行事

SDG sの学びを生かした学校生活の見直し ～ジェンダーレスな学校を目指して～

今治市立立花中学校
教諭 合六 梨夏

提案要旨

1 はじめに

本校は、生徒数432名の中規模校である。教育目標「心豊かに活動する生徒の育成」の実現を目指して、「自他を大切にできる心を育てる教育の推進」を重点目標として掲げ、SDG sについての学習に力を入れてきた。その1つであるジェンダー平等に着目し、生徒会本部役員が中心となって制服選択制などの実施可能な取組について話し合いを重ね、令和5年度の新入生から新制服の導入を実現できた。生徒一人一人が自分たちの生活を見つめ直し、よりよい学校へと生徒主体で変容することを目指して本主題を設定した。

2 実践事例

(1) SDG sの学びを生かした取組

ア ジェンダー平等についての学習と実践

事前学習として質問紙や新聞記事を用いてジェンダー・バイアスに対する認識や個性の大切さなどについて各学級で学習した。その後、各学級からの提案内容を生かして、委員会活動における男女比の制限の撤廃や運動会での男女別種目の廃止など学校全体で実践可能な取組につなげた。

イ 制服選択制に向けた話し合い

生徒会本部役員により、制服選択制に関する全校アンケートを実施し、分析結果を全校生徒に返した。続いて現行の制服が抱える課題についての話し合いを各学級に呼び掛け、得られた意見を集約し、分かりやすく全校に共有した。このように生徒会本部役員が、各学級の意見を整理し次に議論すべき論点を絞り込み、再び各学級に返して次回の話し合いにつなげる流れを丁寧に繰り返すことで、制服選択制の決定、制服を変える意味の再確認、デザインの検討などについて全校の合意形成を促した。また、保護者や地域の方などで構成する校則検討委員会や制服メーカー、小学校に対して橋渡しの役割を担った。

話し合いを通して醸成した全校生徒のジェンダー平等に対する思いについて、生徒会本部役員によって「立花中新・意識改革宣言」としてまとめ、学校から社会に向けたメッセージとした。

(2) 生徒主体の校則検討

ア 校則について見直す話し合い

新制度の導入にあたり、制服を中学生らし

く着用するための決まりについて話し合った。また、校則検討委員会と協議し、新しい校則ができた。現在は制服以外の校則をより時代に合ったものにするため活動を継続している。

3 成果と課題

- 生徒会本部役員が主体となって学校全体で話し合いを重ねた結果、市内で最も早く制服選択制を導入した学校となった。生徒からは、本活動が将来の後輩に波及する議題であることを自覚し、各学級での学級活動において意欲的に話し合いに参加し関わろうとする姿が見られた。また生徒会本部役員は、全校生徒と地域をつなぎながら、生徒自身が自発的に課題を解決する活動の中心となり、リーダーとしての自覚を深めた。
- 生徒が代替わりをしても、先輩のSDG sやジェンダーレス平等に対する意欲的な学びと実践またその過程を、いかに自分のこととして考え、受け継ぐかが課題である。今後も新制服の意味や経緯を改めて問い直しながら、自他を大切にできる心の育成を継続する必要がある。
- 教職員自身が社会の状況に広く目を向けて学び、価値観をアップデートしていくことが必要である。制服選択制の導入について、前例がないことを理由に大人が生徒の意見を尊重しないでいたならば今回の実現は成しえなかった。今後とも生徒が生活の中に課題を見付け、よりよくしていこうと主体的に考える生徒を育てるため、生徒を支え続ける存在であり続けたい。

研究協議・指導助言

- 円滑にジェンダーレス化を進める工夫について
→ 運動会の演技種目では、男女で実施可能な内容を採択している。委員会活動では保健体育委員など男女比について必要に応じて柔軟に対応しているものもある。
- 生徒と学校と保護者や地域の方など多く立場の思いが重なり合い、互いに関わり合うことで人とのつながりがさらに深まり、広がる。また、活動を通して、新たな課題や探究の発見につながる学びが連続することが望ましい。

第3分科会 中学校生徒会活動**主体的な生徒会選挙の実践
～ICTの効果的活用を通して～**

松山市立拓南中学校
教諭 鳥生 香奈
教諭 相原 大毅

提案要旨**1 はじめに**

本校生徒会では、「やればできる、誇れる拓南」を生徒会目標に掲げ、執行部役員を中心とし、自治的・自発的な活動を行っている。これまでの生徒会役員選挙では、選挙管理委員会を立ち上げ、選挙運動・立会演説の後に投票を行う、民主的な手法を用いてきた。現在、1人1台端末が設備されていることを受け、生徒会選挙においてICT機器を効果的に活用することで、生徒の参画意識をより高めるとともに、効率と公正の観点でも質の高い選挙を実施することができるのではないかと考え、活動の充実を図った。

2 実践事例**(1) 生徒会役員選挙における選挙活動****ア 朝の挨拶運動**

立候補者や応援者が、朝、正門に立ち、大きな声で挨拶をし、学校を活気づけていた。

イ 選挙ポスターの作成

各教室に、顔写真と抱負を掲載した選挙ポスターを掲示した。また、各学年の玄関にも選挙ポスターを掲示し、「名前」「抱負」以外は色もデザインも自由にすることで、立候補者の創意工夫が見られた。

ウ 体育館での立会演説会の実施

「表情を見て立候補者の意見を聞いてもらいたい」という前年度のテレビ放送演説会の反省点から、体育館での立会演説会を行った。聞き手の反応を見ながら、演説をすることができていた。

(2) タブレットを用いた投票**ア ロイロノートでの投票（前期生徒会役員選挙）**

ロイロノートのアンケート機能を用いて、複数人を選択できるようアンケートを作成し、選挙投票を行った。アン

ケート結果の集計が迅速ではあったが、手動で回答を締め切る必要性があった。また、「投票人数に満たない」もしくは「投票人数以上に投票する」などのミスが発生した。

イ Microsoft Formsでの投票（後期生徒会役員選挙）

前期生徒会役員選挙の反省を活かし、「投票人数に制限をかけることができる」「URLを知る本校生徒のみが投票可能である」「時間の制限をかけることができる」「秘密選挙である」「開票作業が楽である」という利点から、Microsoft Formsでの投票を行った。効率と公正の観点でも質の高い選挙を実施することができた。

3 成果と課題

- 体育館での立会演説会を通して、相手の反応を見ながら演説できるため、抑揚や間の取り方を考え、工夫を凝らした演説ができていた。良い緊張感での演説会が実施でき、「全校生徒の代表を選ぶ」という意識が高まった。
- ICT機器を活用した選挙ポスターの作成を通して、各々の個性あふれるポスターが出来上がり、それをきっかけに生徒会選挙により興味を持つことができていた。また、容易にデザインすることができるため、修正もしやすく、教師の負担も軽減した。一方で、ICT機器の利用が不得手な立候補者は作成に苦勞し、ポスターのクオリティに差が出てしまった。
- Microsoft Formsでの投票が、効率と公正の観点からも質の高い選挙を実施することができた。回収や集計の手間も省くことができ、教師や生徒の負担軽減にもつながった。

研究協議・指導助言

- ICT機器を活用した選挙ポスターの作成や選挙投票の実践例を聞くことができ、とても参考になった。自校でも実践していきたい。
- この生徒会活動によって、生徒が自主的に活動する場面が増えたように感じる。リーダーだけでなく、フォロワーの育成にもつながっている。想定以上の生徒の成長を見ることができており、主権者教育にもなる。ICT機器を活用して、生徒とどのような関わりができるか、今後も研鑽を積んでほしい。

1 特別講演について

- 学級活動（1）の基本となるところから学び直せた。また、学級会の様子がとても心に残った。
- 指導要領に立ち返り、原点回帰できた感じがした。
- 特別活動の在り方や、今の時代の様子を踏まえた上で、子どもたちと共に成長していくことの大切さが分かった。
- 特別活動の基本的なところから学ぶことができた。学級活動（1）～（3）の違いなど、もう一度確認することができた。

2 分科会について

- 「とっかつはじめのいっぽ」では、学級会の本質を実質的に学ぶことができ、学級づくりに生きる内容だった。話合いが停滞したときに教師がどのように手助けするかについては、研鑽を積んで身に付けていくことのように感じた。
 - 司会に立候補された先生が熱意を持って進めてくださり客観的に勉強することもできた。話合いが停滞したときの声掛けやファシリテートの仕方など、今後実践を重ねていきたい。
 - 各先生方の取組から、一人一人の思いが伝わり、学校をそして子どもたちを新たな可能性へと成長させようとする姿に感動した。今後の実践に生かせるよう、励んでいきたい。
 - 参加者が小学校・中学校のどちらの先生もいたため、互いが児童会と生徒会の活動の様子を知ることができた。小学校でここまで成長してきているなら、中学校では・・・など小中連携の話も出ていた。互いの実情を知ることができ、とても良かった。
 - 指導助言でいただいた言葉や、Q&A座談会で教えていただいたことなど、どれも有益な情報ばかりで参加して良かったと思った。いただいた知識を自分のものにできるように、これから実践していきたい。
 - 中学校での取組を聞けて、大変勉強になった。中学生へ送り出すための貴重な材料となった。
- ◎ 運営面についても、多くのご意見をいただきました。今後の研修会等に生かしてまいります。ありがとうございました。



編集後記

今年度も夏季研や特活勉強会、様々な研修会等を通して、たくさんの特別活動に取り組まれている先生方と出会うことができました。先生方の熱意に触れることで自分自身も触発され、「あの取組をアレンジしてみようかな。」「もっとこんなことをしてみよう。」と学びを子どもたちに還元することにつながっていきました。もちろん楽しいことばかりではありません。事前準備の大変さや先生同士で足並みをそろえることの難しさなど、頭をひねることも多くあると思います。そこで生きてくるのは「為すことによって学ぶ」という特活の精神ではないでしょうか。まずは一步踏み出してみる。失敗も成功も含めて、子どもたちと先生と一緒に一つのことを創り上げる経験を共有すること。子どもも先生も愛顔になる特別活動を目指して、これからも取り組んでいきたいと思っています。